詩篇　第121編1節～8節

1節に私たちは立つこと度々である。前面にそびえたつ、越えがたい山を見上げ絶望のあまり先が見えない。行く手に絶壁のごとく立ち上がる山を見て嘆息するばかりである。この歌い手も同じであったと想像できる。

助けを探し求め、声に出して叫ばなければならなかったのだ。独り立つときであったかもしれない。山のふもとに着き、人ひとり居ない鬱蒼とした森林の間から見えた山に向かっていただろうか。それとも荒地に立って仰ぐ岩だらけの剣山を見上げていたのだろうか。

見上げる山の陰には谷間がある。その谷間の底に立つとき、さらに次の山が眼前にそびえたつ。谷底から見上げる山は一層険しく迫る。谷を越え、山を乗り越えるとまた底知れない程の深い谷が待っている。歌い手の生涯はまさしく山を越え、谷を通り、また山に登るものであったと容易に想像できる。私は山に向かって目をあげる。

谷底から目をあげる。そして、倒れそうになり言う、私の助けは、どこから来るのかと声を出す。私が山の前で立ちすくみ、谷底にうずくまっても。私の助けは、天地を造られた主から来る。山でも、谷でも主がおられる。